身近に普通にみられるセセリチョウのなかではきらびやかできれいなチョウがキマダラセセリだが、イチモンジセセリやチャマダラセセリほど多くはなく、筆者も高砂では西畑の斎場内でホシミスジの観察中に一度みかけただけで、そのときにはカメラを向けたとたんに飛び去られて記録がとれなかった。セセリチョウの仲間は人の気配にとても敏感なのだ。

今回、加古川市で絶滅危惧ⅠB類選定種であるヒメヒカゲの生息調査活動の際に、久しぶりにキマダラセセリに出会えた。あいかわらず人の気配には敏感だが、食草となるススキなどが繁る環境であれば、強く驚かさない限り、一度飛び立ってもすぐに近くの草葉の上にとまってくれる。セセリチョウの仲間は胴体にくらべて翅の大きさが小さいけれどジェット機のつばさのように尖った精悍な形の4枚羽をもち、草葉上にはその翅を4枚ともに斜めにもちあげた、とても格好のいいスタイルで静止する。翅にくらべて胴体が太いことは、翅の付け根の筋肉がとてもよく発達していることでもあり、セセリチョウの仲間は例外なくチョウの中では最も速くとぶことができる。

写真記録のような（愛好家がV字姿勢と呼ぶ）姿勢をとってくれるとき、翅表の黄色部分が太陽光線のあたり具合で金色を帯びて輝くことがあり、とてもきれいだ。翅の裏は和名のとおりまだら模様となっていて、信州などにはヒメキマダラセセリなど翅表の模様がたいへんよく似たセセリチョウがいるけれど、キマダラセセリのような裏面模様のチョウは他にはいないので区別は容易である。6月頃にみる個体はその次の夏型にくらべて大型で見栄えがする。

キマダラセセリの学名は *Potanthus flavum* であり、属名の *Potanthus* はギリシア語の複合語 Poto+anthos をラテン式に書き換えたもので”花を吸う”という意味があり、*flavum* はラテン語 *flavus* の中性形で” 黄色の”という意味である。

幼虫はエノコログサも食べるというからもっと身近に普通にみられてもいいと思われるチョウ。

July 1, 2020　ヒメヒカゲ調査 Ser. 21 by Car (Final)

6月27日にヒメヒカゲが3♀観察できたことから、まだ生きているような気がして、月替わりの初日、確認目的のフィールド訪問。フィールド到着は14時で、調査を14時5分に開始。草原一帯を涼しい風が吹き抜ける状況で、天候は曇り。ケネザサに覆われる小道を歩くと、キマダラセセリとホソバセセリが観察でき、ウラナミジャノメと入れ替わって第二化の新鮮なヒメウラナミジャノメが発生している。

Copyright© 1998- Soft House JUMP. All rights reserved.